
緋弾のエリア ~ The world five years later ~

888

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

緋弾のアリア〜The world five years later〜

【Nコード】

N8909T

【作者名】

888

【あらすじ】

緋弾のアリア〜緋弾に集いし仲間達〜の5年後です。ブラドを逮捕してかなえさんの冤罪を認めさせた別の世界線の物語です。ちなみに『チームバスカール』は編成しています。

ロンドンへ

これからチーム『バスカービル』について話をしよう。

まずはこのチームのリーダーこと、遠山キンジについてだ。

彼はとある体質のせいで中学生のとき散々苦労したらしい。

ヒステリア・サヴァン・シンドローム

それが彼の持つている体質の名だ。これは彼が性的興奮をするとな
る、多重人格みたいなものだ。

彼らの一族は代々この力を使って正義の味方をしている。

彼はこの力を自由に使うことは出来ない。だけでも、彼のお兄さん、
遠山金一は自由にこの力を使うことが出来た。女装することによっ
て。

|||||

とある飛行機の中

俺たち、といつても俺とクリスの二人だが、いま、イギリスのロン
ドンに向かっている。友人の結婚式がそこで行われるからだ。

その夫婦の名は、妻が『神崎・H・アリア』夫が『遠山キンジ』。

そう、昔一緒に戦ってた奴らの名だ。

「楽しみだね。」

そう言ってきたのは隣の席にいる『アリア・クリス』。彼女は5年
前に人身売買で助けた人だ。

「そうだな。あいつらの顔を見るのも久しぶりだな。3年ぶりか？」
首を横に振るクリス。

「違う。2年と9ヶ月28日ぶり。」

「細かいなクリスは。」

微笑を返してくれるクリス。

「動くな！」

突如現れた動くなという声。まさか、武偵がいる便でハイジャックとはすごい自信だな。

「動くな！はおまえだアホオ」

俺が立つてそのハイジャックを仕掛けている人間を取り押さえる。が、俺の後頭部に銃口が突きつけられる。

「おまえこそ動くな武偵！いいか、この便はわれわれがハイジャックする。おとなしくしていれば危害は加えない。そして銃を捨てる！」

俺は振り返る。

「動くな！」

俺に銃口を突きつけている男は若干脅え気味で威しをかける。

「安全装置が掛かったままだぞ新米。」

男は銃のチェックをする。その瞬間に俺は左手で銃を抑え、右肘で顔を殴り右足で足払いをかける。

ガチャリ

「はい、逮捕だ新米」

「クツ。クソツ。」

そしてその後は何事もなくロンドンに着く。

ロンドン空港ではアリアとキンジが迎えてくれる。

「よう、キンジ、アリア。久しぶり。」

まず最初に俺が会話を切り出した。

「ああ、久しぶり。」

「そうね、久しぶりね、クリス、京助。」

メールの周知（前書き）

今回も短いです。

メールの周知

俺はキンジにちよつとしたことを聞く。

「キンジ、ランクは？」

「Sだ。3年前とは違う。それに、ヒステリアモードにも自由になれるようになった。」

「ほう、そらすごい、ホントかアリア？」

アリアもあれからかなり成長した。

「ええ、ほんとよ。まったく。最初聞かされたときはびっくりしたわ。」

|| || || ||

「そういえばほかのみんなは？」

俺がキンジに聞く。

「おまえ達が最後だ。まあ、白雪はさっきの便で来たけどな。」

そこでクリスが口を開く。

「白雪先輩。黒雪先輩になってなければ良いけど……」

「むしろ純白雪じゆんはくか灰色雪はくしになってるんじゃないか？」

「いや、顔半分は純白でもう半分は真っ黒だったぞ。」

「マジか！」「ウソだ。」

「まあ、会えばわかるさ。」

|| || || ||

ホテル内

「まさか、ホームズの結婚式にリュパンが来るとはね、思ってもみなかったよ。」

そういった俺だが、まったくそのとうりだ。

で、いまここにいるのは、俺、クリス、武藤、江梨、不知火、理子、ジャンヌ、中空知、レキ、白雪、と、当の本人達だ。

「おめでとう、神崎さん、遠山君、おっと、神崎さんは旧名だったね。」

「キンちゃんの……お嫁さん……ふ、ふふ、ふふふふ、……」

「クリス！きょう君の彼女はわたしだあ！」

「ふふふ、実力で奪ってみる？」

「ホームズ、遠山、貴族として祝いの言葉を送ろう。」

とまあ、そんな感じにわいわいになっていた。

「俺明るいうちに買い物してくるわ。」

「あ、じゃああたしも。」

「あたしもいきますう！」

そんなこんなで、俺とクリスと、江梨で買い物に行くことになった。買い物といっても、その辺をうるつくだけだが。

出てすぐして、バリインというガラスが割れる音がした。

「まったく、命知らずな強盗か？」

「京助、ここはやらせて。」

クリスがそう言う。

「よし、まかせた。」

クリスが中に入ると、バコ、ドカ、ドスン、ボコ、ピコなどの音が錯覚として聞こえてきたような気がした。マンガなら建物が伸び縮みしているだろうな。

「終了。」

クリスは犯人を逮捕してきた。ボコボコにして……

ピロリピロリ、ピロリピロリ

メールの着信音。

「なになにメール？だれから？」

「さあ、えーと、『ロンドン近くの海水浄水施設、ビッグ・シエルで大規模テロが発生した。付近の住民は速やかに逃げるようお願いします。』だってさ、ん、テロ？テロだっ！？」

「うわぁー、こりゃ大変ねえ。」

クリスがのんきなことを言っている。

「何を言っている。近くで、そんなテロがあったってことは、俺たちも駆りだされるんだぞ。」

「へえ、……なに！って言うことは……結婚式は、」

「延期だな。急いで戻るぞ！」

7年ぶりの再会

俺はすぐにホテルに引き返す。

「みんな！メールは見たか!？」

みんながうなずく。

ピロロロロ　ピロロロロ

俺のケータイが鳴る

「もしもし。誰だかは知らんが忙しい。またあ」

『待ってくれ京助。僕だ、ハルだ!』

「ハルか!」

『ロンドンでビック・シエルが占拠テロにあつたようだね。』

「ああ、なぜそれを……」

『詳しいことは話せない。ただ、テロの首謀組織はわかった。』

「待ってくれ!ここに居るみんなにもその話を聞かせてもいいか?」

『ああ、いいよ。』

俺は電話の音量を最大まで上げる。

「続けてハル。」

『うん。そこにいる皆さんにもわかるよう最初から言う。ビック・

シエル占拠テロの首謀組織がわかった。その組織の名は、デット・

セルだ!』

「デット・セルだと!？」

その声の主はこの中にはいない。

俺たちは声がしたほうに反射的に銃を向ける。

「銃を降ろしてくれ。俺は敵じゃない。」

「証拠は?」

「はあ、これを見てもらえる?」

彼の周りから、電流が流れる。

すると、アリアが口を開く。

「あなた、まさか、『紫電の雷神』？」

アリアがその言葉を発した瞬間ホテル内が沈黙に飲み込まれる。

一番最初に口を開いたのは、俺だった。

「『紫電の雷神』聞いたことがある。たしかG30オーバーの、超能力者！」

「うそ、わたしでも封じ布を解いてG20だよ。」

俺はハルに向かってしゃべり始める。

「ハル、どうだい？彼も仲間に入れるか？」

「うん、もしビツク・シエルに突入するなら、彼もいたほうが心強い。」

「というわけだ『紫電の雷神』、おまえも加担するか？」

「ああ、そうさせてもらおう。もし、デット・セルがいるなら……」
続いて武藤が声を出す。

「なあ、デット・セルってなんなんだよ。」

「ハル、説明頼む。」

『了解。デット・セルとは、2年前にアメリカの大統領が結成した対テロ組織の名前。でも、大統領が辞任に追い込まれグループは解散。でも、また集まり再結集。そして半年前にグループのリーダーが死亡してデット・セルは対テロ組織から凶悪犯罪組織に激変した。デット・セルは犯罪者から何の罪のない子供たちまで殺し始めた。拳句の果てに仲間にも手を使った。』

「俺はそのデット・セルを追っている。」
話を理解したらしい武藤。

ババババババババババ

外からローター音が聞こえる。

俺たちはみんな外に出る。

『みんな乗って！』

スピーカー越しにさっきまでケータイで話していたハルの声が聞こえる。

俺たちはへり、カサツカに乗る。

へりのドアが自動で閉まる。

「久しぶりだね京助。」

「ああ、久しぶりだな。7年ぶりか？」

アリアが当然の疑問を訊いてくる。

「ねえ京助。この人って知り合い？」

「ああ、この人は天才科学者。ハル・エメリツヒ博士だ。」

「京助、あまり紹介はよしてくれ。」

「照れることじゃないと思うけどな。そうだ、紫電の雷神、自己紹介をしてくれ。」

「成瀬レインハート。よろしく。」

成瀬レインハート、電撃を操る凄腕超偵。

「ハル、ハルたちの隠れ家に向かってくれないか。あそこには大量の武器があるだろ。」

「わかった。」

すると江梨が眼をキラッキラに輝かせている。

「武器！いいじっていいですか？」

「ああ、彼に許可を取ったらね。」

そして、このへりは隠れ家へと向かう。

7年ぶりの再会（後書き）

成瀬レインハート、通称レイン君の使用許可はプーモ先生から取っています。

キャラクター紹介

雛菊京助

好きなもの（こと、ひと）

アニメ、ゲーム

素直な人

甘いもの、魚介類

キライなもの（こと、ひと）

野球、サッカーの延長

甘いもので唯一キライなものは『かたライチ蟹』

人に嫌がらせをする人、泣かせる人

遠山キンジ

アリアとは結婚式を挙げる前にテロが起こり、延期。
テロが収まり次第、挙げる予定。

神崎・H・アリア（旧名）

遠山・H・アリア

アリア・クリス

雛菊京助と恋人的恋愛関係

好きなもの（こと、ひと）

秋葉原

雛菊京助

キウイフルーツ

キラいなもの（こと、ひと）

ぶりっ子の集団

唐辛子

武藤

現在は自分で作った飛行機、ヘリ、で世界を旅している。

今野江梨

好きなもの（こと、ひと）

甘いもの全般（特にすきなのは『さくらんぼ』）

雛菊京助（磯のアワビの片思いで終わりそうです。）

キラいなもの（こと、ひと）

アリア・クリス（依頼を受ければそれは受ける）

渋いもの

エビ、イカ、たこ

不知火亮

原作と同じ

（いまの武偵ランクは限りなくSに近いA）

峰理子（理子・峰・リュパン4世）

原作と同じ

ジャンヌ（ジャンヌ・ダルク30世）
原作と同じ

中空知 美咲
原作と同じ

レキ
原作と同じ

（レキは何がすきなんでしょうね、カロリーメイトですかね？）

星伽白雪
原作と同じ

（キンジに対しての一方的な片思いはいまも変わらず）

ハル・エメリツヒ
通称「オタコン」
MGSと同一人物です。

成瀬 レインハート
『緋弾のアリア 紫電の雷神』を参照。
（使用許可は本当に取ってあります。）

作戦会議

隠れ家

そこには大量の武器と機材と携帯軍用食レーションがおいである。

「あまりじろじろ見ないでくれ。」

「ハル、彼はどこ？」

俺はその彼を探す。

「ああ、奥にいるよ。」

後ろで江梨は目を輝かせて武器を見ている。

俺は部屋の奥に行き、その彼を見つける。

「久しぶりだな、京助。」

「ああ、相変わらず元気そうだな、蛇スネーク。」

ほかのみんなもこの部屋に入ってくる。

「なあ、京助。誰なんだこの人？」

そう問うキンジ。俺はその質問に答える。

「みんなにも紹介しておく。彼は不可能を可能にする男。ソリッド・

スネークだ。」

そこにハルが説明を付け足す。

「公には公開されてないけど、君たちはシャドーモセス事件を知っ

てる？」

みんなが首を横に振る。俺とレインを除いて。

ハルは説明のために口を開く。

「簡単に説明する。今から8年前、アメリカのアラスカ州・アリユ

ーシャン列島・フォックス諸島の沖にある孤島。それが、シャドー

モセス島。そこで事件はおきた。その事件の名前を。」

そこで俺が説明を引き継ぐ。

「シャドーモセス事件という。そこで鉄の歯車、メタルギアが開発

されていた。」

不知火が「メタルギアってなに？」という顔をしている。

「メタルギア、簡単に言えばたちの悪すぎる戦車だ。なにせそれは、
」
そこからレインにバトンタッチする。

「メタルギア、それは、核搭載二足歩行戦車のこと。」
キングたちは『核』という言葉に反応する。

「核、だって！？バカな。そんなのニユースにすらなっていないぞ。」
武藤は『核』という言葉信じられずにいる。俺は説明を再開する。
「ああ、最初にハルが言ったように公には公開されていない。でも、
事実だ。いまレインが言ったのはメタルギアREXのこと。そのの
開発者が」

「僕だ。」

キングたちは驚愕している。そう、もしそれが本当ならハルは核兵器開発者となる。

「続けてハル。」

俺は説明をハルに促す。

「わかった。確かに僕はメタルギアを開発していた。僕は騙されて
開発を続けていた。」

「それを、俺が破壊した。」

スネークが喋る。

「オタコン、ライターを取ってきてくれ。」

ハルはスネークにライターを渡す。

「スネーク、まだ煙草をすっているのか。あれほど止めるといった
のに。」

「あ、あの、弄らせてもらってもいいですか！」

江梨は武器を指しながらスネークに問う。

「ああ、まあいいが。」

「かわった娘だね。」

「江梨は武器の改造がシユミなんだよ。」

テュルルル テュルルル

「だれだろう？」

『スネークか。』

「大佐!？」

「ロイ・キャンベル!？」

スネークとレインが口を開いたのは同時だった。

『スネーク、なぜそこに武偵がいるのだ?』

「オタコンが連れてきたんだ。俺のせいじゃない。」

『まあいい。スネーク、キミはビック・シエルに乗り込んでもらう。』

「オタコン。」

「うん、元からそのつもりだよ。それにあそこには、メタルギアが有るかもしれない。」

そこでレインが口を開く。

「そうか、ビック・シエル、ビック・シエル巨大な貝。もしあれがメタルギアだとすれば……」

俺は少し作戦を練る。

「みんな、チームを練ろう。キャンベル大佐、ビック・シエルの見取り図はありますか?」

『ああ有る。今からそのデータを送ろう。』

そして、データが届く。

「広いな。」

ジャンヌが率直な感想を漏らす。

ビック・シエル。その名のとうり相当巨大だ。A Lブロックまで有る。六角形をイメージしてそれが縦に二つ並んでいる感じだ。その六角形の頂点一つ一つにブロックが有る。

「こつもでかいと制圧には時間が掛かるな。」

「キンジがそう言う。」

「じゃあ、制圧しなければ良いだけだ。」

俺が答えるとアリアが喋る、

「じゃあどうすんのよ!？」

「かんだんだ、内部崩壊をさせればいい。」

クリスが反論してくる。

「言うは易し、行うは難しよ、この人数じゃあね。」

「だから削るんだ。3人2チームだ、俺、レイン、ジャンヌのAチームと、キンジ、アリア、しら……」

「きょうくん、行かせて。」

白雪……

「わかった、Bチームは、アリア、キンジ、白雪だ。異論は認める。」

……

沈黙は肯定のしるし。

「わかった。それでは、残った者はサポートにあたってもらいたい。」

「了解」

「それと、スネーク、一人行動で良いな？」

「わかった。問題ない。」

『では、作戦をまとめる。Aチームはデット・セルへの攻撃、Bチームは爆弾の除去、スネークはメタルギアの破壊。残ったものはサポートに回る。Aチームは30分後海から潜入、Bチームは45分後空から潜入、スネークは50分後Aチームと同じところから潜入。良いな。』

『了解！』

潜入開始

アルファ
Aチームビックシエル潜入まであと20分

俺たちは今近くの公園にいる

「ねえ京助。」

そう言ってきたのはクリスだった。

「なんだ？」

「5年前の約束覚えてる？」

「ああ、覚えてる。」

5年前の約束。あのときの七夕か。

「あれ、今教えてほしいな。」

「やだ。でも、俺が帰ってきたら教えてやる。」

「…わかった。じゃあ1つ依頼^{クエスト}。京助が潜入しても絶対に帰ってく

る。武偵憲法第2条、依頼人との約束は絶対守れだからな。」

「わかってる。俺はあんなところで死ぬつもりはない。少なくとも

……………まではな。」

「え？なんていった？」

「なんでもない。」

5分後

俺たちは隠れ家に戻る。今この部屋にいるのは、ハル、俺、レイン、
ジャンヌ。

「京助、ジャンヌ、レイン君、これを着て。」

ハルがウエットスーツらしきものを渡してくる。

「ウエットスーツか？」

ジャンヌが問う。

「うん。でも、自動止血機能を備えている。それに、君たちが持っているていどの武器なら一緒に持っていくこともできるよ。あと、酸素マスクと、これ。」

「注射器？」

「正確には、無痛注射器。中身はナノマシン、旧型だけど体内通信はできる。」

「ありがとうハル。」

僕達はその無痛注射器を首筋に当てる。

『聞えるレイン、ジャンヌ。』

『ああ、問題ない。』

『ちゃんと聞えている。』

ジャンヌ、レインはちゃんと聞えているらしい。僕達は体内通信を切る。

「じゃあ、コードネームを決めておこう、俺は『暁』、ジャンヌは

『吹雪』、レインは……」

「俺は『水月』でいい。」

「私は『吹雪』でいいのだな。」

ハルが、出発の10分前を告げる。

「みんな早く用意を。武器は最低限のものを持って行ってくれ。後でBチームがヘリで持っていく。それまでは自分達が持っていた武器と現地調達で踏ん張ってくれ。」

「了解」「」

^{アルファ}
Aチーム潜入開始

俺たちAチームとBチームとクリス、江梨は今海岸線にいる。

ここからだどビツク・シエルが見える。

「京助、2条、忘れないでくれ。」

「ああ、もちろん。死ぬ気は毛頭ない。」

と、クリスと俺。

「あんたは昔ママに冤罪を着せた敵だった。」

「でも、今はもう仲間だ。」

「私はお前たちの仲間になっただつてもりはない。」

と、アリア、キンジ、ジャンヌ。

「星伽の巫女、だな。」

「はい。」

「護るべきものを護れ。」

「はい。」

と、レインと白雪。

そこで通信が入る。ハルからだ。

『では、暁、吹雪、水月。そろそろ時間だ。』

俺たちはじゃあなといってから海に飛び込む。

そして、ビツク・シエルに着く。

アルファ
Aチーム、作戦開始

潜入開始（後書き）

京助のCNコードネーム暁

ジャンヌのCN吹雪

レインのCN水月

暁と吹雪は日本の駆逐艦の名前です。

水月はプーモ先生の『緋弾のアリア』紫電の雷神』を参照。

A棟

ビック・シエルは海上浄水水域に設けられた巨大建造物だ。

海面下は太いワイヤーで魚などの侵入を防いでいる。

俺はそのワイヤーをハルから貰ったワイヤーカッターで切る。

『吹雪、水月、切れたぞ。』

俺たちはそこからA棟に侵入する。

A棟には緊急脱出用の潜水艦エスケープが有る。それを出すために海とつながっているのだ。

俺たちは各自武器を取り出す。

『良いもん見つけ』

『暁、畏だったらどうするんだ！』

『問題ない吹雪。ちゃんと畏かどうか確認してからとったから。それに麻醉銃はあつて困ることもないし、サイレンサーも装備してある。おまけにID登録されてないから。』

『そういう問題ではない！』

『暁、吹雪、誰か来る。隠れて。』

レインが教えてくれた。その少し後に巡回兵が来る。

『デット・セルを倒す前に見つかったら終わりだな。』

ジャンヌがそうつぶやく。まあ、ビックシエル全体の敵と俺たちじやあほぼ100%負ける。

そして、巡回兵はすぎていく。

行つたか。そこで無線が入る。ハルからだ。

『暁、吹雪、水月、もうすぐエレベーターがAすぐ近くに到着する。それに乗り込むんだ。でも近くには敵がいるから気をつけて。』

そこで無線が切られる。早速麻醉銃の出番だな。

俺たちは通路を進むと貨物庫に出る。認視出来るのは1人、俺はその兵に向かつて麻醉弾を撃つ。うまく首筋に当たったので物の2秒とせずに眠ってしまった。そしたらちよつとエレベーターが着いた

ので俺たちは乗る。

俺たちは皆マスクを取る。そろそろ切れるからだ。

エレベーターはそのまま屋上へと向かう。

近くの扉から中に入ると敵兵がいた。

「俺は上を見てくる。」「わかった。」

そんな会話をしていた。俺たちはのこった1人の視界を避けながら
B棟に向かう。

A棟（後書き）

みじかいのをちよくちよく更新していきこうとお思います。

B棟

A棟の左の通路を抜けると通路が有る。通路といっても棟と棟を繋ぐ連絡橋だ。

幸いここには兵士が居ない。が、目視できるだけでもサイファア無人偵察機が1機ある。

『水月、頼む。』
『任せとけ。』

サイファアは回転翼で浮いている。だからその回転翼を止めてしまえばサイファアは落ちる。

レインはサイファアに電流を流す。すると、徐々に回転が遅くなり、ジヨボン

下の海に落ちてしまった。

俺たちはそのままB棟に進む。

B棟はどうやら発電施設のような。

ゴツツ

音がしたほうを見ると、死体が転がっていた。胸に穴があいているものがあれば首を切られているものもある。

「誰がこんなこと……」

俺がつぶやく

カシヤ

俺たちは反射的に音のしたほうを向きながら構える。

「気のせい？」

ジャンヌが口を開く。

「吹雪！避ける！」

俺は吹雪めがけて、いや、吹雪の後ろに居る人物めがけてD・Eを発砲する。

「『雷弾』！」

雷弾、それはレインの技の1つで手を銃の形にして指先から電撃が放たれる。

ジャンヌは若干何が起こったかをまだ完全に理解できていない。やったか？

「まだだ！まだ終わってない！」

レインが叫ぶ。

すると男は立ち上がった。

「ほう。イレギュラー因子風情が。」

「久しぶりだなヴァンプ。会いたかったぞ！」

レインがその人物に向かって叫ぶ。

「ヴァンプ……だと。」

俺もこの男の特徴は知っている。頭をうたれれも……死なない。

「なるほど。不死身の男というわけか。いいだろう、私が相手になつてやる。」

ジャンヌはデュランダルを取り出しながら言う。

「これには銀をコーティングしてあるぞ。」

俺はジャンヌに向かってヴァンプの情報を伝える。

「違う。そいつは言うならば吸血鬼だ。だが、ブラドのように生ぬるい相手ではないぞ。そいつには、銀は効かない。そもそもそいつは超能力者でもブラドのような奴でもない。れっきとした人間だ。」

「ただの人間が水月のあのような技を食らって生きているわけがなかるう！」

ピシユン

俺の顔の真横を何かが過ぎる。

「そろそろお喋りの時間は終わりだ。」

その言葉が合図になり俺たちは戦闘を開始する。

「いいか暁、吹雪、あいつは殺す気でやれ。さもなくば、」

「俺たちがやられる、か。」

その通りだ、とレインは言う。

俺は本当の『殺人狂』モードに入る。

ジャンヌはデュランダルでなぎ払う。が、避けられる。

「チッ！」

俺はD・Eで額を狙い、撃つ。

バアアン

と、鉛玉がD・Eから放たれるが、

ピシンッ

と、ナイフで切られる。

「ふん。所詮はこの程度。」

「雷弾！」

レインの指から電撃が放たれる。が、やはりそれも避けられる。

ババババババ

と、俺はマイクロUZIを連射する。ヴァンプはバレリーナのよう
に回転をしながら俺に接近してくる。普通なら当たるはずだ。が、
当たらない。

「当たらない。だと……」

ヴァンプが俺の目の前まで来る。

俺はベルトの金具部分に仕込んである超小型銃でヴァンプを撃つ。

ぐうおお、とまるで人ではないような悲鳴を上げるヴァンプ。

「これで止めだ！」

バアアン

と俺はヴァンプの額を撃つ。

俺はそれでヴァンプを戦闘不能まで追い込んだと思った。が、甘か
った。

俺が後ろを向いた瞬間に

ヴァンプが起き上がった

この場の全員が驚愕する。

ヴァンプが腰に巻いてあるナイフケースに手をやる。

(ヤバイ、殺られる。)

次の瞬間。

「伏せる！」

ババババババ

と、銃声が聞こえる。正確にはM4の銃声。

「いまだ！水月！」

「雷砲！」

レインは自分の持っているFNブローニング・ハイパワーで敵を撃つ、レインだけの出来る技だ。科学的には『ローレンツ力』で物体を撃ちだす、即席の電磁加速砲レイルガンみたいな物だ。

が、ヴァンプは天井付近に張り巡らされているパイプに跳ぶことでそれを避ける。

声の持ち主は、スネーク。

「待たせたな！」

シユタ

と、ヴァンプが上から降ってくる。スネークの後ろに。

「グワア！」

スネークの悲鳴。

ヴァンプはスネークの頭を掴み、持ち上げる。スネークはとっさにレインにM4を投げてくる。

そして俺の視界にここに入るはずのない人間が視界に入る。全身タイツのようなスーツを着ている人間だ。髪は黄色、武器は何も持っていない。

ヴァンプはスネークの首に口を近づける。吸血鬼らしく血を吸うつもりだ。だが離す。

「お前、変わったたにおいがする。」

ヴァンプはスネークを床に放り投げる。

「お前、まさか！？」

そして、ヴァンプの無線で会話をしている。

「何をしている！？撃てえ！」

スネークが叫ぶ。

レインがM4を構えると、ヴァンプは消えていた。

俺はさっきの人影にガバメントの銃口を向ける。

「そこのお前、でて来い！」

すると、その人影はすんなりと出てくる。

ほかのみんなもその人影に銃を向ける。

「動くな！」

「……」

近づいてみると、その人影は男性だった。しかも24歳程度の若い男性。

「何者だ！」

俺は尋問を開始する。

「……」

「答える！お前は何者だ、と聞いている。」

「……俺は、雷電。おまえたちの敵ではない。」

「雷電？変わったコードネームだな。まあ、敵でないなら良い。来い。」

俺は仲間の場所にまで戻る。

「大丈夫だ。こいつは敵じゃない。」

「コードネーム雷電だ。上からお前たちとは戦うなといわれた。」

スネークが反応する。

「雷電？変わったコードネームだな。お前、名前はなんと言っ？」

「……本名は平凡だ。」

「若いのに、武器はどうした？」

「持っていない。」

「そうか、ならばこいつをやろう。」

スネークが渡したのはソーコム、これまた信頼性抜群の銃だ。

「それとこれだ。」

スネークはタバコを渡す。

「プリスキン、煙草は勧めるものじゃない。」

俺がそういう。

「俺はタバコは吸わない。」

「まあいいじゃないか。何かの役に立つこともある。」

雷電はしぶしぶタバコも受け取ると、どこかに行ってしまった。

レインはスネークに向く。

「プリスキン、どうする？」

「俺はここで少し休む。」

「すまぬ、私もすこし休ませてもらう。」

「そうか。じゃあ水月行くぞ、棟へ。」

B C 連絡橋

俺とレインがB棟を出ようとしてスネークに聞きたいことを思い出
し無線を入れたところ、スネークは寝ていた。

『グウウ』

（相変わらずのんきだな。）

と俺は心の中でつぶやく。

『……………リキッドオオー！』

ビクウウ、と不意に背中に銃を突きつけられたような錯覚に陥る。

レインも通信に入っていたようで二人で同じ反応をした。

B C 連絡橋への扉を通り抜けると、雷電がいた。

雷電が銃を構える先には女が立っていた。

「あれは幸運の女神。フォーチュンデット・セルの一人だ。」

レインが説明する。

「ついでに言うと、リーダーだった人物の、妻だ。」

フォーチュンの目線の先にはSEALSシルスと呼ばれる組織の数人がい
る。

ついでにスネークが着ていた服もSEALSが着ていたものと同じ
だ。

ババババババ

とM4と思われる銃をフルオートで撃つ。その弾丸はフォーチュン
の心臓、脳天、その他もろもろの臓器に直撃し、即死する。が、弾
は気紛れかフォーチュンの目の前であさっての方向に向かって飛ん
でいく。

そして、フォーチュンの目の前には、アメリカ大統領が倒れている。

「さあ、誰か私を殺して。」

バババババ

とSEALSはさらに銃を撃つが結果は同じ。

「だめだ、弾がそれていく。」

「あれが幸運の女神か。」

SEALSがつぶやく。

そして、フォーチュンの後ろからヴァンプが出てくる。

「姉御」

それだけの意思疎通。

ヴァンプはアメリカ大統領を抱えてフォーチュンの後ろ、第一中央棟に下がっていく。

「まずい、大統領が。」

SEALSの一人がそうつぶやいたときC棟から新たなSEALSが出てくる。

そのSEALSもまたフォーチュンに向かって銃を撃つ。

が、無駄と分かったのだろう、銃撃をやめる。

「擲弾発射器だ！」

SEALSの一人がそう叫ぶ。

ボン

と手榴弾を放つ。しかし、着弾しても爆発はしない。

不発である。

SEALSの者はみなフォーチュンに向かっていく。

フォーチュンは手に持っている巨大な銃を構える。あれは、電磁加速砲^{ガン}。昔俺が使ったやつよりもはるかに強力になっているであろう。

「今日も私は不幸になる、誰も私を殺してくれない。」

フォーチュンがトリガーを引いたとき、ピュン、という音と共に物体が発射される。

「うああ！」「ああああ！」

などのSEALSの悲鳴と共に中央棟への橋が壊される。

運が良いのか悪いのか、辛うじて橋の端にぶら下がっている兵士もいる。が、やがて力尽き海に落ちた。

上空を飛んでいた数匹のかもめも落ちていく。きつと運悪く放電された電流にあたったのだろう。

「ごめんねかもめさん。私も、すぐに逝くから。」
「そう言い残しフォーチュンは中央棟に去っていった。」

B C 連絡橋（後書き）

擲弾発射器

これの中では『グレネード』とかかかれてますが、正確には『グレネードランチャー』です。

C棟

チーム『バスカービル』の話をしよう。

チームバスカービルは『遠山キンジ』のほかにも数名の構成員で構成されている。

副リーダー『神崎・H・アリア』

彼女はかの有名なシャーロックホームズの、曾孫だ。

ただ彼女には戦闘力は遺伝されても推理力は遺伝されなかった。

そのため血族の間では『落ちこぼれ』『出来損ない』と罵られていた。

が、そんな彼女にも運命の出会いというものがあつた。

それが、遠山キンジとの出会い。

ホームズ家は皆パトナーがいないと自身の力を十分に発揮できないのだ。

そのパトナーに選ばれたのが、『遠山キンジ』だ。

彼女は彼のお蔭で自身の力を十二分に発揮することができた。

|| || || ||

俺たちはBC連絡橋を通りC棟に向かった。

道中にSEALSが落としていったと思われる電波欺瞞紙散布手榴弾ドを拾った。幸いにもAD登録はされていない。

そのまままっすぐ進んで行きC棟に入るための扉をくぐる。

C棟に入り少し進む。

『水月、雷電、先に行く。合図したら付いて来い』

レインと雷電は首を縦に振る。俺はその反応を確かめてから角から首だけを出す。すると、CD連絡橋の扉が開く。俺は瞬時にチャフを構えるが、まったくの無駄だった。そこから出てきたのはアリアとキンジと白雪だったからだ。

「京、じゃなくて暁、吹雪はどうした？」
キンジがたずねてくる。

俺は首筋に指を向け、ジェスチャーで意思を伝える。

『暁、そいつは何者？』

アリアが雷電に向かつて銃を向けながら俺に聞く。

『まあ待てアリア、ここはいろんな意味で目立つ。中に入るぞ。』

俺は銃を構えながら横にあつた扉に入る。

中には人間がいた。

雷電はその人間にSOOCMを向ける。

「動くな」「撃つな」

その人間は自分は何もしないという風に手を上げる。

「警官？」

アリアが問う。その人間はニューヨークの警官の服を纏っていた

「いや、^{NYPD}ニューヨーク市警ではない。ブラボーチームと共に来た。

キミたちは？見たところ部偵みたいだが・・・SEELSの連中はどうなった？」

「全滅した。」

俺が答える。

「爆弾解体半も全滅したわ。」

アリアが追加説明する。

「・・・全滅！？そいつはよわった・・・」

その人間は立ち上がるうとする。

「まだだ、動くな！」

雷電が銃を突きつける。

そのとき、

「大丈夫だ、その男は敵じゃない」

スネークがやってくる。

「誰彼かまわず銃口を向けるもんじゃない若いの・・・」

スネークは人間に向き、あんたは、と、問う。

「ああ、わたしはピーター。ピーター・スティルマン」

「ピーター・スティルマン!?」

アリアが声を上げる。

「インディアンヘッド海軍爆弾兵器処理学校の教官：NYPD爆弾処理班の顧問でもある」

「…そう」。そして今回貧乏くじを引いた哀れな老人」

「引退したと思ってたわ」

「あなたが爆弾処理の教官？」

「若いのに、この先生を知らないとは」

俺はアリアに説明をお願いした。

「この人、ピーター・スティルマンは爆弾解体のどの教本にも出てくる先生よ。昔有名な教会と大勢の命を自分のミスで死なせた。でもこの人は自分の右足一本で済ませた。でも、引退した。まあ、わたしたちみたいなきつい人は知らない人も多いと思うけど。でも、引退した人がどうして？」

ここにいる皆の視線がスティルマンに向かう。

「…今回のテロリストの一人に私の教え子がいる。爆弾王ファットマン。わずか10歳で原爆を組み立てた爆弾マニア。奴は私が創った。私はこの体だ、現場で指示を与えるはずだった。しかし、その作戦も失敗だ」

「いや、そうでもない」

俺が言う。

「少なくとも爆弾処理を目的に来たものが3人。それと爆弾処理に精通したプロが2人。」

俺はアリア、キンジ、白雪、スティルマン、スネークの順に指していく。

「あんたら、シール・テンSEAL10の人間か？突入前のブリーフィングでは見なかったか？」

「ああ、別働隊なんだ俺はプリスキン中尉。よりしく先生、あえて光栄だ」

スネークは右手を出しながら言う。

「プリスキン中尉、爆弾処理の経験はあるのか？」

「俺なら大丈夫だ。そっちの若いの達に手伝ってもらおう」

「いや、俺は…」

スティルマンが俺達に向かう。

「あんだ達名前は？」

雷電は何か言おうとしたが、スルーされる。

「ああ、俺は雛菊京助、こっちがジュンヌダルク30世ことジャンヌ、こっちが『紫電の雷神』こと」

「成瀬レインハートです」

「私はアリア、神崎・H・アリア」「俺は遠山キンジ」「私は星伽白雪」

「H、ホームズ家の娘か」

スティルマンが少々驚いたように目を見開く。

「俺は雷電だ」

「変わった名だな」

「他に生存者は？」

「私と一緒にもう一人の技術者が、やせた男だ、私たちと一緒に降下したんだがさっきの騒ぎの間はどこかへ。彼は『ビッグ・シエル』のセキュリティ・システム設計者というところだった」

「なぜ民間人を？」

スティルマンと雷電の会話が続く。

「ここは全てがコンピュータ管理されている。設計者の彼がセキュリティを解除する役目だった。政府発行の命令書も持っていた」
そこにスネークが介入する。

「とりあえずそいつのことは置いてこう。今はやつらの仕掛けた爆弾をどうにかすることが先決だ」

「SEAL10の爆弾処理班は全滅した」

「ああ、だから俺たちだけでやるしかない」

「悪いが爆弾処理の経験はない…ちよっと待ってくれ」

「おいおい、ボスに相談か？」

そして約一分後

「どうだ若いの、結論は出たか？」

雷電は何も言わないところを見ると結論は出たらしい。

ステイルマンは一度爆弾解体の手本を見せるといっているので俺たちはステイルマンと対面するように立つ。

「深刻に考える必用はない。君たちにやってもらうのは正確には解体ではない。あくまでも爆弾の一時的な凍結処理だ。所詮素人に解体は無理な話。いいか、見ている」

言うとステイルマンはC4を起動させる。それをスプレーで吹き付ける。するとC4に霜ができたかと思うと凍ってしまった。

「なるほど、やることは凍結か。これなら素人にでもできる。」
キンジがつぶやく。

「どれくらいこの状態が持つ？」
雷電が問う。

「この状態で爆発することはまずありえん。このまま放置でも24時間は大丈夫だ。人手があればちゃんと解体したいが仕方あるまい。スプレーの飛距離は数メートルだ、壁、床、天井、机の下あらゆるところを探すんだ」

「何か爆弾の位置がわかるものはないの？」

ステイルマンは自分の持ち物から道具を取り出す。

「これをもつていけ。俗に言うイオン易動性蒸気探知機えきじつうの一種だ。C4から発生する気化ガスを探知する」

「何だつて？」

「雷電。つまりだ、人間は探知できない匂いをC4が発生させていてそれを探知するのがこれだ」

「匂いのないC4があつたら？」

アリアが訊く。

「…私は、ファットマンを良く知っている。奴は自分の美学にこだわる男だ。」

「サインか」

スネークが言うと、そうだと、ステイルマンが答える。

「あいつは作った爆弾に必ず自分の使っている香水を吹きかける。例外は一つもない。センサーはその香水の匂いにも反応様セツティングしてある」

「それも、あんたが教えたのか？」

今度は俺が問う、が、ステイルマンはいや違う、あいつ自身のこだわりだ、と答える。

「あいつは法にも常識にも従わない。だが、自分の決めたルールにだけは従う奴だった。あいつには何もかも教えたつもりでいた。子供のいない私は親子同然の関係だった。あいつには優れた素質があった。あいつは特別だ、あいつほどの才能は見たことがない。海軍^{ンティアンヘッド}爆弾兵器処理学校でも特別扱いだった。いつしか奴は『特別扱い^{フラット・キャット}を受ける人と呼ばれていた。それがいけなかったのかも知れん。最も伝えなければいけないこと伝えられなかった……」

「人には語り継がなければならぬこともあるそれを間違えないことだ」

スネークが言うと、そうだと、ステイルマンは言う。

「私はあいつに技術しか伝えられなかった、なんとしてもあいつを止めなければならぬ」

「そのセンサーとやら、効力を見せてくれないか？」

スネークが言うとステイルマンは俺たちにセンサーを渡す。

「スイッチを入れてみる」

俺たちがスイッチを入れるとナノマシンにリンクされ自分の見ている場所に薄い黄色で現れた。それはかなりの広域、まあ無いよりはましだが……

「我々のいるコ棟にもフラットマンは爆弾を仕掛けているはずだ、この近くに」

いくら爆発の危険が少ないとはいえ、何時爆発するかもわからない

爆弾が自身の近くにあってぞつとしない人間はいないだろう。

「この構造はわかっている。奴がこのプラント、『ビック・シエル』を爆破した場合各棟に最低一つづつ爆弾が仕掛けられているはず。ここにダメージを与えるには最低限それだけ必用だシエル1に6個所、シエル2に6個所、少なくとも計12箇所。『ビック・シエル』の構造と材質、力学上から見ての結論だ。無論、奴も同じ結論に達したはず」

スネーク、雷電、アリア、キンジ、白雪はセンサーとスプレーを受け取る。

「若いの達、シエル1を頼む。俺はシエル2の爆弾を解体する」

「これをもって行け」

スティルマンは雷電にカードキーらしきものを渡す。

「これは？」

「この職員のセキュリティ・カードだ。『ビックシエル』はレベル別のセキュリティ・システムが敷かれている。それぞれ、扉にかかれたカード・ナンバーに対応している。雷電、君のカードはセキュリティ・レベル1の扉を開けることができる。プリスキン、君はセキュリティ・レベル4、ホームズ家の娘にはレベル3、京助にはレベル2、隣のシエル2に行くにはレベル3以上のカードが必用だ。本来なら彼がここで最終レベル、レベル5に進入できるカードを偽装するはずだった。したがって、ほぼ全てではあるが全てのエリアに侵入できるわけではない」

「残りのセキュリティは個別で対応するしかないわね」

アリアが口を開く。

「……さて行くか。」

スネークが歩き始めると、スティルマンも歩き始める。

「スティルマン、あなたはここで待っていてください」

俺が言っているとスティルマンは私も行く、と言う。

「いや、俺達だけで十分だ」

雷電が追い討ちをかける

「しかし……」

「その足でついてこられても、はつきり言うが、邪魔なだけだ」
俺が少々きつめの言葉で止めを刺す。

「ここは私達に任せてもらおう。あんたは当初の予定通り無線で指示をしてくれ」

ジャンヌが言う。

「……わかった。私はここでサポートをする。まさかのための準備をしておいても良いかも知れんな。…みんな、頼むぞ。かなり危険な任務だが」

「危険を冒すものが勝利する。センプー・ファイ常に忠実に」

そう言いスネークは食堂を後にする。

「……あの男、SEALSではない」

「えっ?!」

「……センプー・ファイ、常に忠実であれ。ジャーヘッド海兵隊の言葉だ」

俺達は無言で食堂を後にする。

「キンジ、アリア、白雪は俺達と反対方向に回ってくれ。それと俺の勘があつてれば、C4の一つは女性用トイレにある」

「な、あんた、ふざけてる場合じゃないでしょ!」

「まあ怒るなアリア、キンジが俺に嫉妬するだろ」「誰が!?!」「お前が」

俺達はCD連絡橋へと歩き出す。

「じゃあまた、とにかく調べてみてくれ。俺達はこっちから行く」
そう言いC棟の扉をくぐる。

くぐった瞬間に目の前にあったのは、気絶した敵兵、その奥にはダンボールから足が生えて動いているというなんとも不思議な光景。
レインはすでに指を向けてバチバチ痛そうな電気がなっている。

「待て水月!あれはプリスキンだ!」

「あ、あれが。プリスキン!?!」

「そうだ、あいつは少々変人なんだ」

「少なくともお前に言われたくはないかと思っぞ私は
俺達は敵兵を起こさないようにして進む。」

Aチーム爆弾凍結D、E棟 Bチームヴァンプと対峙

俺達はD棟に入る

『ここは？』

ジャンヌがつぶやく。無論無線でだ。

『ここは汚染処理施設場。下に水があるのが見えるだろう、誤ってもあそこに落ちるなよ、這い上がれなくなる』
俺が答える。

『まさか、重油か』

レインは勘が良いらしくすぐに気付く。

『ああ、重油だ、幸い警備兵は1人。ジャンヌ、爆弾はどこら辺に？』

『あそこだ』

ジャンヌが指した場所は敵兵のいる真後ろ。

『いいか、3秒後に続け』

俺が麻醉銃M9を構えながら言う。

3
俺は音も無く駆け出す。

2
相手の心臓部分に麻醉銃を打ち込む。

1
瞬時に近づき首の後ろを殴る。

0
レインとジャンヌがこっちにくる。

『これか』

俺は爆弾を指で指す。

ジャンヌは超能力で凍結する。

『爆発は？』

俺が聞くとジャンヌは、この状態で爆発は無い、と断言してきた。

俺達は敵が起きる前にD棟を去る。

DE連絡橋

ここにも敵が一人しかいなく、悠々とE棟に向かう。

おかしい、数が少なすぎる。

俺はそう思った。

E棟にはベルトコンベアがあった。たぶん空輸してきた物資を各棟に送るためのベルトコンベア。

俺達はここのフロアには爆弾が無いことを確認した上で屋上に向かう。

屋上に向かうための扉を潜り屋上のヘリポートへ出るために階段を上があると、そこには雷電がいた。

「どうした雷電？」

俺が問う。

「いや、なんでもない」

素っ気ない返答。ヘリポートにはハリアー2がとめてある。

「あつたぞ吹雪」

レインが爆弾を見つけジャンヌが凍結しに行く。

「雷電、お前はどつする？」

「俺は・・・単独で行動する」

「そうか、何かあつたら無線で連絡をくれ」

俺がそう言うなり雷電は去った。

「じゃあ、アリアたちと合流しよう」

「ああ」「わかった」

レイン、ジャンヌは肯定する。

そこで無線が入る。アリアからだ。

「暁、吹雪、水月、状況はどう？」

「今3つ目の爆弾を凍結した」

「そう、じゃあ、A棟に来て。ものすごい物を発見したわ」

「それは良い物か？」

『まったく、良いも何も、物凄く悪すぎる物よ。とにかく来て。ステイルマンにはもう連絡したか…』

そこで通信が切れる。いや、強制的に切断されたといってもいい。

「A棟に急ぐぞ！早く！アリアたちが危ない！」

俺は無線も忘れそのまましゃべってしまった。それがいけなかったのかもしれない。

カツ、カツ、カツ、と階段から音がする。人が上ってきている。

|| || || ||

同時刻 A棟海中ドッグ

「通信が遮断されたわ」

キンジは空中に散布されている金属片を手に取る。

「これが」

「キンちゃん、アリア、気をつけて。誰か来る」

白雪はエレベーターに向けて構える。俺とアリアも銃を構える。

そして、相手は姿を現す。

「しゃあなあ！」

蛇のような叫びを上げるその男は、

「キンジ、白雪。全力で行かないとまずいわよ、そんな気がする」

俺はその言葉に肩を震わす。

すでに白雪は封じ布を解いており斬りかかる。

「星伽候天流 緋？ 毘 《ヒノカガビ》！」

白雪の刀、イロカネアヤメから焰が出る。

奴はそれを横に跳ぶことで回避した。

バンバンバンバン！

と、4回の銃声。

アリアがガバメント撃つたのだ。

『理子！あれの弱点はわかるか！？』

『待って、・・・出た、そいつはヴァンプ。どうやっても死なない、

頭を打ち抜いても。そいつはもう死んでるから。」

『なんだって!』

俺は驚愕する。いや、あるはずが無い。死んだ人間が動いてるなんて。そんなのはゲームやマンガでしか見たことが無い。

『分かった。じゃあ他に弱点は?』

『弱点、つてほどでもないけど、そいつの頭を打ち抜くと一時的に生命活動が停止するらしい。』

らしい、か。不確定要素が多すぎるな。

『サンキュ理子』

俺はそれだけ言い無線を切る。

「星伽候天流 緋火虞鎚!」

見ると無線をしていた極短時間の間にアリアも白雪も息を荒げているのに対し、ヴァンプは息一つ上げていない。

「アリア、白雪、バトンタッチだ」

俺はアリアと白雪を後ろに下げながら前に出る。

「キンジ、気を付けて、何発か銃弾を撃ったけど、まるで効かない」
「わかった」

俺はヒステリアモードになる。このヒステリアモードは、ベルセ。ヒステリア化が終了したらホルスターから抜いたベレッタをフルオートで撃つ。

銃弾は、右脇腹、みぞおち鳩尾、心臓、首、頭の順にそれぞれ2発の銃弾を浴びせる。

「ぐわあああ!」

ヴァンプが悲鳴を上げ倒れる。

「アリア、白雪!逃げるぞ!」

アリアと白雪は俺と一緒にヴァンプの乗ってきたエレベーターに乗り、動き出す。

独りになったヴァンプは、起き上がった。

ヴァンプは長い舌で額に付いた自分の血を舐める。

「大丈夫かアリア、白雪」

「ええ、大丈夫。でもあんた、9条」

「問題ない。奴は、死なないとの報告があった」

「でも、死なないなら白雪の技を避ける必要は無いわ
なるほど。そういうことか。」

「分かったぞ、トリックが」

ええ？と、アリアと白雪が声を上げる。

「理子が額を打ち抜かれると一時的に活動を停止するって言った。
ということは奴は完全なる不死ではないということになる。したが
って白雪の剣技を避けたのは、切り落とされるとヤバイからだ」

白雪の頭にいくつかの疑問符が浮かんでいる。

「でもどうして？」

「言つたら、奴は、完全なる不死ではない。たぶん、ナノマシンで
自然治癒能力を高めているだけだと思う」

「なら、もしその仮説が本当なら、奴を攻撃していればいずれは死
ぬ、ということね」

俺はうなづく。

すると、エレベーターはガチャン、という音と共に屋上に着く。

カツ、カツ、と何者かが上ってくる。

『奇襲で終わらせるぞ、いいな吹雪、水月』

うなずくレインとジャンヌ。敵の頭が見えた瞬間、俺たちはいつせいに撃つ。が、弾が反れる。敵が持っている武器は、電磁加速砲。レールガン

その敵の名は、

「幸運の女神フォーチュンか。厄介な敵だ」

俺が言くとフォーチュンは静かに構える。銃先は若干の放電のためビリビリいつている。

「お前達なら私を殺せるかもしれない。さあ、私を、殺して」

ピュウン、と空を切りながら発射される弾。それを弾く、否、弾き返すレイン。その弾き返された玉は電磁加速砲レールガンの銃口に吸い寄せられるように戻る、が、弾はあさつての方向に逸れていく。

「そいつに銃は効かない！吹雪、水月、接近戦で行くぞ！」

俺は叫ぶと、肯定の返事があつた。ジャンヌはレインを盾に迫っていく。

ピュウン！ピュウン！と弾が放たれるが全て跳ね返されるが、跳ね返された弾はあさつての方向に逸れていく。俺は接近しながら考える。奇跡は何度も起こるわけではない、あの奇跡にも何かトリックがあるはずだ。

「水月！砂鉄だ！」

俺はレインに砂鉄の詰まった袋を投げる。レインはその砂鉄袋を水月で切り裂き、電気をつなげて砂鉄の剣にする。それで斬りにかかるが、砂鉄は途中でばらける。が、床に落ちずに滞空している。なるほど、そういうことか。

「水月！分かったぞトリックが！たぶんだがそいつの腰についてるものを狙え！」

レインは言われたとおりに水月で斬りにかかるが、阻止せんとばか

りにピュウン！と撃ってくる。それをレインは回避しながら接近して、水月で斬りつける。

「はぁあッ！」

レインは電磁加速砲を狙って斬るが、フォーチュンは巧みに動かして回避する。

「だめだ、手が出せない」

ピュウン！と撃たれる鉄の弾丸。

レインはそれを水月で跳ね返すと、それはそのまままっすぐフォーチュンの電磁加速砲の銃口に戻っていく。が、反れる。

「やはりだめか」

「はぁあア！！」

ジャンヌが後ろから斬りにかかる、がデュランダルの剣速は次第に落ち、仕舞いには止まる。

フォーチュンはその隙に後ろを蹴りジャンヌを吹っ飛ばそうとするが、ジャンヌは氷で威力を弱める。

俺は試しに空気中の砂鉄を金に換え、金の剣を造る。

それで斬りにかかったところ、剣は跳ね返されずにフォーチュンに届く。

『姉御クイーンここは引くべきだ』

「（そうね。そうするわ）」

フォーチュンは階段をコツコツと下りていく。

「待て！」

俺達が階段を見たときにはすでにフォーチュンはいなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8909t/>

緋弾のエリア ~ The world five years later ~

2011年10月8日23時33分発行